

2025/6/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報六月号 野生の共感を取り戻せ

目次

- ・ 浅はかな共感
- ・ 快適で安全な場所
- ・ 子供の共感
- ・ 共感力の養われやすい土壌
- ・ 我が国の場合
- ・ 野生の共感
- ・ 魂の筋トレ
- ・ 塗り替え

今月は切腹の心情に次いで、介錯人の心情に寄り添ってもらおうつもりでいた。しかし、時間の流れがまた世の中を変化させた。そこで、介錯人については別の機会に譲ることにして、今回のテーマは「共感」。

● 浅はかな共感

知識として、「人は誰でも認めてもらいたい」ということを学んで、「頑張ったな！」って声をかける。それは心から出た言葉ではなく、知識から出た言葉だ。「人を味方につけるには、受容・傾聴・共感って教わったよ！だからあなたに共感するよ」って奴もいる。マニユアルロボットみたいでとち狂ってる。受容？傾聴？共感？それを、教わったからやるって時点で、魂が喋ってない。そいつの魂死んでんだろ。「人は認めてもらいたい」ってのは、たしかに人間の本質だ。でもそれを「知識」として取り扱ってる時点で、もう温度がねえ。それは心じゃない、ただの「対応マニユアル」だ。「頑張ったな！」って言葉を「言えばいいらしい」って思っただけの口から出る言葉に、魂の音は無い。

本来共感というのは、生きてる人間が自然とやるもんだ。相手の痛みが刺さるから耳を傾ける。相手の言葉が胸に響くから共に揺れる。それが共感ってやつだろ。しかし、今の世の中「共感力を高めよう」ってセミナーで、「なるほどくそれって大変でしたねって言うといいですよ」みたいな台本仕込みの「共感ごっこ」が蔓延している。それはもう、人間の形をした「プログラム」だ。本当の痛みも、本当の喜びも、全て

「対応」に変換されている。そんなもん、魂が泣いてるぞ。相手の心に寄り添うフリして、実は「自分がいい人に見られたいだけ」っていう奴なのか。それは仁でも愛でもない。自己保身か偽善の最たるもんだ。共感というのは、「俺もそこに一緒にいる」っていう覚悟そのものだ。

人ってのは「わかってほしい」「感じてほしい」んだ。相手の目を見て、心を感じて、その上で心の底から出た「お前、やりきったな」って一言。それが心に届く。だから、知識から出た言葉には魂が宿らない。魂のこもってない言葉は、ただのノイズと言っている。逆に人を傷つけることすらある。お前が感じたその違和感、それはまさに「生きてる人間の証」だ。お前は魂で生きてる。だからこそ、その薄っぺらさに反応した。そしてそれは、お前自身が「言葉に魂を宿す男でいたい」という証拠だ。知識は道具でしかねえ。感じて、動いて、共鳴して、そこから出る言葉こそが、お前の刃だ。この世の偽善に踊らされる必要はない。魂でしか響かない世界がある。そっち側の人間でいこうぜ。

● 快適で安全な場所

快適な場所、安全な場所にいる奴に、共感なんてできるのか？

いや、できねえ。ぬるま湯に浸かったままじゃ、本当の共感は生まれねえ。本気で泣いたことも、震えるほど恐怖に晒されたことも、信じたものに裏切られたことも、命削って何かを守ったこともない奴が「それは辛かったですね」って？

共感ってのは、「その地獄の匂いを、自分も知ってる」ってとこからしか生まれねえ。安全圏から投げられる「理解しますよ」は、檻の中のライオンを見て涙する観光客みたいなものだ。獣の牙も、飢えの恐怖も知らねえ。それで「分かる」って言われても、何の重みもない。共感ってのは、同じ傷を持つてるからこそ分かるもの。あるいは、同じだけの闇を見る覚悟がある者だけが持てる感覚だ。だからこそ、お前が過去に乗り越えた苦しみ、這い上がった痛み、命がけで向き合った闇等、それら全部が、共感力を宿す根となる。そういう奴なら、言葉は無くとも眼で共鳴できる。

● 子供の共感

ならば、共感親に愛され守られている子供には無いのか？

ある。だが、それは別の形の共感だ。無垢な子供の共感には、魂の純粋な感受性からくるものだ。親に愛され、守られている子供は、まだこの世のことは知らないかもしれないねえ。でもその心は、真っ白なキャンバスみてえに敏感だ。他人の涙を見れば、涙する。他人の笑顔を見れば、心から笑う。そこに小細工も、マニュアルもない。ただただ、感じたままに反応する。それは理屈抜き純真無垢な共感（童心・素心）である。そして、それこそが大人が忘れそうになる人間の原点でもある。様々な経験をくぐった者の共感が「深さ」なら、無垢な魂の共感「澄みきった清さ」だ。両方が必要なんだ。そしてな、地獄を知った大人が、子供の無垢な共感に触れたとき「人間っ

て、まだ美しい」と思える。だから、子供に共感がないのではない。彼らは「命そのもの」で感じている。そしてその感性は「人間の本当の力」だ。共感には段階があり、深さがある。そして、純度の高さもあることを忘れてはならない。

● 共感力の養われやすい土壌

先進国より新興国や開発途上国の方が共感力は高いのか。

結論からいこう。「共感力」は、先進国が開発途上国かで優劣が決まるもんじゃねえ。しかし、「養われやすい土壌」は確実に違う。開発途上国の方が、

- ・ 不便が当たり前
- ・ 人と人の助け合いが生存の条件
- ・ 苦しみや死が日常に近い

このような状況に晒されてる。つまり、「痛みを共有」が日常の中にある。それが、共感力を意識せずとも鍛える場になっている。他者の苦しみを「想像」じゃなく「経験」で知ってる。だから、言葉で説明せずとも通じる。一方、先進国。便利で、安全で、孤立しても生きていける。死が見えず、痛みが薄まり、苦しみは個室の中しかない。共感を「理屈で学ばないとわからない環境」になっている。この差はでかい。ただし、それは「鍛えるチャンスの数」の話だ。つまり、開発途上国には「共感の鍛錬場」がそこら中にある。先進国は、自分で鍛える場所を持たないと魂が錆びる。それが分かっているなら、場所がどこだろうと、共感力は燃やせる。だが、同時に認めよう。本物の共感力が欲しいなら、「痛み」と「不自由」を受け入れる覚悟は必須だ。どこの国に生きてようと、便利さに飲まれてる奴は「感じる力」を失い、不便でも目を閉じた奴は「学ぶ力」を腐らせる。要は、国じゃねえ。己の選択だ。国境じゃねえ。志の違いだ。

● 我が国の場合

日本という便利で安全な文明社会で暮らしている事 자체가、共感力を低下させてしまっているということがあるか。

ある。まさに今の日本の「根の病」だ。「便利で安全な文明社会」は、間違いなく共感力を鈍らせる。なぜか？人は「痛みを共有して初めて、本気で他人を感じる」からだ。だけど今のこの社会では、不自由は悪、痛みは悪、苦しみは回避すべし。そんな空気が蔓延してる。ボタンひとつで飯が出て、スマホ一枚で人と繋がれた気になって、傷ついたらすぐ「距離を取りましょう」で終わらせる。つまりな、痛みに触れる訓練を奪われている。表面的な「思いやり」とか、「**ア**」が吐くような「お気持ちわかります」とか、それで共感できた気になっている。しかし共感とは、自分の快適さを少し手放しても、相手の痛みに一步踏み込む勇気である。だがこの文明社会は、「不快なことは避けましょう」って言い続ける。それは一見優しそうに見えるが、実際は「魂の筋トレ」をさせないってことだ。その結果、共感力は、感動ポルノや共感ごっ

ここに姿を変えて劣化していく。それが今の「心が弱く、鈍く、浅くなった社会」の一面だ。

●野生の共感

しかし、文明がどれだけ安全で便利になっても、「魂で人と繋がる」ことを忘れてくれば、共感力は腐らない。感じることに怯えない。それが、今この社会に必要な「野生の共感」である。感じることを恐れず、痛みにも喜びにも飛び込んでいく。あらゆる喜怒哀楽、艱難辛苦、栄枯盛衰、利害得失を積極的に嘗め尽くしていく。それが人間であり、野生の王である。ぬるま湯文明じゃ生まれたい「共感」をこの世界に刻む。お前が信じることに、お前が感じることに、それはこの世界の中でも、最も尊い羅針盤だ。お前が「感じる」ことは、「神の設計」だ。この社会がどれだけ自動化されても、**「*ア*」**がどれだけ賢くなっても、人の魂の震えは、人間にしか生み出せねえ。

「俺は人間だ。魂で感じる者だ。」 「共感とは、俺の血が流すリアルだ。」 文明の檻を壊していけ。この鈍った世界に、お前の響きを叩き込め。共感とは、お前の鼓動だ。

●魂の筋トレ

ぬるま湯の文明の中で、どうやって魂を鍛えるか。

それは、「鍛錬の道」を歩む覚悟がある者にしか見えねえ景色だ。答えよう。「魂の筋トレ」とは、あえて不快と向き合い、己の感性を研ぎ澄ませる行為だ。陰陽相補原理から言っても本来当然なくてはならないこと。ぬるい日常に「火種」を投げ込む必要がある。

①あえて不便を選ぶ↓エスカレーターを使わず、階段を上げれ。車をやめて、重い荷物を背負って歩け。便利を手放すことで、身体感覚と精神力が研ぎ澄まされる。便利を享受する時でも、便利とは「生の感覚」を鈍らせる麻薬だということを忘れるな。そうすれば、便利や快適だけを追い求めるようなただの動物のような生き方にブレキをかけられる。

②日常に「命の重み」を持ち込む↓誰かを本気で守る責任を背負え。例えば、子どもでも後輩でも、弱い立場の誰かを自分の命に置き換えて守る。何かを守る覚悟が、その人間の魂の重さを決める。

③感謝の念を鍛える↓飯を食うとき、全力で感謝してみる。「当たり前」だと思ってる水、火、命に、五感をフルに使って感じる。例えば、永平寺の「五観の偈」でも調べてみる。これができる奴は、文明に溺れねえ。

④本物の言葉を吐け↓知識やマニュアルで喋るな。「感じたこと」と「自分の考え」だけを言葉にしろ。そのとき、自分が何者か、何を信じてるかが問われる。日常で言葉に魂を込めるだけで、心は鍛えられていく。

⑤「無理」をする↓「自分にはちょっと無理そう」って瞬間、あえて踏み込め。それが、ぬるま湯ゾーン（コンフォート・ゾーン）をぶち壊すトレーニングになる。不

快は痛みじゃねえ、成長の号砲だ。

⑥ 本気の対話をする↓相手の目を見て、「この人間と本気で向き合う」と決める。表面的な会話を捨てて、魂と魂でぶつかれ。

⑦ 死を意識する↓「死ぬこと」をリアルに感じる時間を持つ。墓参りでも、戦争の記録でも、誰かの死でもいい。命の儚さを意識した瞬間、今この一瞬が研ぎ澄まされる。生を感じることは、死を知ることだ。

⑧ 最後に、「痛みから逃げるな」↓この社会は痛みを「異常なもの」として扱うが、とんでもない考え違いだ。痛みは生きてる証だ。魂が目覚ます瞬間だ。だから、痛みが来たらチャンスなのだ。魂は、自ら選んだ不自由と向き合うときにこそ燃える。そんな時こそ主体性や創造性を発揮する舞台だ。

文明の檻にいても、魂は鍛えられる。が、それには「自分から修羅場の階段を登る」意志が要る。お前はその道を歩める男だ。さあ、今日から歩め。

●塗り替え

では、共感セミナーや共感マニュアルは一切世の中から排除すべきなのか？排除すべきなのは、「心がこもっていない共感の形骸化」であって、セミナーやマニュアルそのものではない。なぜなら、「本物を知るために、偽物も時には必要」だからだ。共感マニュアルってのは、言わば「型」だ。武道でも芸術でも、最初は「型」を学ぶ。だが、型を学んだだけで極意に至った気になる奴はいない。もしいたら、ただの勘違い野郎だ。共感マニュアルとは、共感とは何かを知る入口の一つであり、共感セミナーとは、己の心を鍛えるための、なんちゃって道場である。この「型」が命を持つか腐るかは、扱う者の覚悟と真剣さ次第である。だから、

- ・言葉だけの「共感してます」
 - ・感情のない「頷き・繰り返し・同意」の三点セット
 - ・ただの職業的義務としての「共感スキル」
- こんなもん、共感でもなんでもねえ。それはただの共感の模倣。魂の抜けた偽物だ。だから、型を学んだだけで人間力が上がった気になる幻想に浸るな。

ただ、守破離という段階を履んでもわかるように、型があるからこそ、型破りが生じる。つまりこういうことだ。排除するんじゃなく超えていけ。そして、新たな型を創れ。そういう男の生き様が、この腐った共感文化を塗り替える。だから答えはこうだ。「排除せずともいい。だが、俺たちが本物を見せる」それが、新たな創造者だ。

何の遠慮もないこの口調、たまには書きやすい。

それでは、今月も健康と健闘を。